

## 1.22 男と女

私は、物心ついてから今まで、自分を男だと信じて疑ったことはないんだけど、最近、「性同一性障害」とかいうなにやらよくわからないのが話題になってきて、改めて自分を男だと証明しろといわれると、どうしたものかと考えてしまうようになってきました。

そうでなくても、実は、以前から「男」と「女」の区別そのものも、それほど明確ではなかったのですけどね。

オイオイ、一体何を言い出すのかと言われてそうですが、  
私たちが男女を区別するに当たって当たり前と考えている「外的形態」だけでは、正確な区別ができないことは確かなようで、オリンピックなどのチェックでは「染色体」の検査などが行われているのですが、それでも完全な区別はできないようです。

と言うことは、世の中には、男と女のほかに男とも女ともわからない人がいる？

まあ、これは男と女をどう定義するかによって、決まるのですけれど。  
辞書を引いてみるとわかるのですが、男と女の定義の仕方には、二つの方法が存在しています。

第一の方法は、人間には男と女しかいないという考え方に立つものです。

例えば、学研の国語辞典、岩波国語辞典あるいは広辞苑などは、

まず「男」を、「人間の性別の一つで、女でない方」と定義し、

次に「女」を、

「人間の性別の一つで、子を産む**能力**をもっているもの」(学研)

「人間の性別の一つで、子を産みうる**身体**の**構造**になっている方」(岩波)

「人間の性別の一つで、子を産み得る**器官**を**そなえている方**」(広辞苑)

と定義しています。

これだと、世の中には、男と女しかいないことになりですね。

でもね、この女の定義だと、困ったことが起こるのです。

例えば、学研の場合、子を産む能力を持たない女の方は、男だということになってしまいます。

女の赤ちゃんや小さな女の子は、まだ子を産む能力がないだけでなく、子を産みうる構造にもなっていませんから、岩波でも男となってしまいます。

また何らかの問題で子を産むことのできない状態にある器官の持ち主も、女ではなく、「男」に分類されてしまうのです。

まあ、しょうがないと言えばしょうがないのですが、カンカンに怒る人も沢山いるで

しょうねえ。

第二の方法は、引き算方式ではなく、それぞれの定義を行う方法で、この方法は、人間には、男でも女でもない人がいるという考えに立っている？のではないかと思われるところがあります。

例えば、大辞泉では、

男は、「人間の性別で、子を産ませる能力と器官をもつほう」

女は、「人間の性別で、子を産む機能のあるほう」

三省堂明解国語辞典では、

男は、「ひとのうち、妊娠させる力を持つもの」

女は、「ひとの中で、妊娠する能力のあるもの」

でもね、これだと、困ったことに、かなり多くの人が男でも女でもないことになってしまう可能性があるのです。

大辞泉では、子を産ませる能力がない人間は、外見上は男のようでも、男ではないことになってしまいますし、器官をなくしてしまった人も男から外れてしまいます。なんとと言ってもイン〇の人が男から外れてしまうのでは、ハンタ〜〜イの声が上がるのじゃないですかね。

三省堂では、これが正面から問題になりますね。

小さな女の子や老婆は、女ではないことは明らかなようですし、男でもないようですから、男でも女でもない人間と言うことでしょうかねえ。

ん！

この定義、よく考えてみると、近い将来、人ごとではないかも知れない、いや、間違いなく、人ごとではない！

どうも、死ぬまで男でいたいと思うなら、広辞苑組を支持しなきゃいけないようですねえ。

### 1.23 男子と女子

さて、昨日の話に出てきた「男」或いは「女」という言葉は、その人の地位、お金の有無、品性、社会的能力、その他社会的なものを一切剥ぎ取った、いわば裸の男性あるいは女性を示す場合に使うことが多いのですね。

例えば、犯罪を犯した女、ドジでがさつな男と言うように。

これに対して、女兒、女子、女性、婦人といった女の人に関する名称の方は、かつて、それぞれ使い方がある程度常識として限定されていましたが、今では、女の人に関するこうした名称の使い方の区分は、なかなか難しくなっているようです。

まず、「女兒」は、今も昔もあまり変化がなく、外見的に見て、女としての特徴が現れる前の幼い女の子を呼ぶ場合に使われます。

次に、「女子」ですが、これは、主として身体的に女としての特徴を備えるに至った「若い女性」に使われました。

ただ、読み方としては、見目・仕草ともにすぐれている女子の場合は、「おみな」或いは「おみなご」と呼ばれ、ふつうの若い子は、単に「じょし」又は「おなご」でした。

最近、それほど若くない女性が「わざと」或いは「誤解の下に」、「女子」という言葉を使う場合があると聞いていますが、笑って済ませられる程度を越えていなければ、ご愛敬として理解するのが穏当かと思えます。

次に、成人に達した女性あるいは婚姻した女性の場合は、「婦人」と呼ぶのが普通だったのですが、あるとき、少し賢しらかな女性がいて、女へんに「ほうき」というのは、馬鹿にしていると言ったのに対して、不勉強な若い女性達が賛同して以来、最近では、次第に使われなくなってきたようです。ダサイとでもいうんですかね。

しかしですね、「箒」は、昔から神道では神聖なもの、大切なものとして位置づけられていました。

箒神は、産神なため、女性の中でも成人あるいは相応の年齢に達した一人前の女性に対して、尊敬の意味が込められて「婦」という言葉は使われていたのですね。

ですから、深い意味も知らずに、女性の側からこの言葉を放棄したことは残念なことだと思います。

かくして、最近、日本には貴婦人も老婦人もいなくなりつつあるようです。

最後に「女性」ですが、これは単に性別を表す場合が殆どで、どの世代にも使うことができるのですが、婚姻適齢に達して以降の女の方に使うのが普通かと思われれます。しぐさ、態度、雰囲気ですぐれている場合、かつては「によしょう」と呼ばれていたようです。

が、これは、今では死語に近いので、そっと心の中で、彼女はすてきな「によしょう」だなあ、とつぶやく場合に使ったらいかがでしょうか。

以上、かなり面倒くさい女性に関する言葉の使い方に対して、男の場合は比較的簡潔です。

男性の場合は、社会的に見て、一人前と認められる前の子供は、「男児」。「児」という言葉の元の形は、「兒」。この字は、頭蓋が閉じきっていない頭を持った幼い子供を指しています。

どの時点で一人前と認めるかは、地域によって違うようですが、昔は一般的に元服後は、男児から男子あるいは「男性」「おとな」になります。男の場合、結婚で、呼ばれ方は変わりません。

ところで、昔の元服は、数え年で12～15歳。今と比べてかなり低い年齢で社会的に一人前とされ、大人として扱われました。現在、元服という通過儀式がなくなったため、男の場合、「男子」という言葉が一人前の男性という意味を失ってきていると思われます。そういえば、年は20になったのに、まだ「男児」としか思えないのが増えてきました。昔の男児に対しても、男子と呼ぶなど「男子」の年齢の範囲が広がったのですね。

結局、女性の場合と男性の場合とでは、社会的に一人前と見られるに至る基準が違っていたので、男子と女子の呼称を単純に比較するのは難しいということでしょう。

え、かえってよくわからなくなった？

## 1.24 お狐様と狸クン

今日もまた、男と女の話。

元々昔のお話ですから、女性差別だあーって怒らないで聞いてください。

一人前になった男と女を動物に喩えると何になるか？

これ、文化圏によって違うようで、ヨーロッパでは、一人前になった男は「狼」にたとえられ、一人前になった女は「羊」にたとえられますが、これは、男性の皆さん、上っ面しかみてないと思いませんか。

女性の方は意見が分かれるところでしょうね。

東アジアでは、どうかご存知ですか？

一人前になった男は「狸」、一人前になった女は「狐」だそうですよ。

私には、なんとなく、こっちの方が正確に人間を見てるような気がしますけどね。

ところで、突然、変なことを言いますが、お稲荷さん、すなわち稲荷神をお祭りしている神社は、全国どこにでもありますよね。

このお稲荷さん、「稲成」あるいは「稲生」と書かれることがあるのですが、これらの名前からわかりますように、元々農業の神様でした。

が、時代が下がってくると、次第に、屋敷神の役割を果たすようになり、さらに商業をはじめとする産業全体の神様になって、今や商売繁盛の神様のようになっている方が多いようです。

お稲荷さんには、「赤い鳥居」と「お狐様」が付きもの。



なかには、お狐様がお稲荷さんの神様だと勘違いされている人もいるようなのです。

えっ、違うの？

そう、化かされてはいけません。

お狐様は、神様ではなく、稲荷神のお使いでしかありません。



これは、まさに神の威を借りる狐ですから、虎の威を借りるより、もっとたちが悪いですかね。

お稲荷様にあげる賽銭の代わりに、自分の好きな油揚げを出させて、それをかっぱらうというのは、問題だと思いませんか？

農業の神様の稲荷神は、昔々は位が低く、従五位の下だったのが、次第に出世して今は正一位まで登り詰めましたが、でもお狐様の方は無位無官。くれぐれもお狐様が正一位と誤解しないでください。

私たちが、お狐様をこのように間違えるのは、田舎の方では、田んぼの悪役、野ねずみを捕ってくれる善玉の獣として、昔から、田の神のお使いとされていたという事情があります。

単にお使いに過ぎないと言っても、につくきネズミを退治してくれるとあらば、「お」が付いて「様」が付いて、ありがた〜い「お狐様」になって下にも置かぬご接待、油揚げなんていくらでもドウゾ、ドウゾお召し上がりくださいですよ。

それに、お狐様は、特別の力を持っていると思われていましたから、神様だと誤解するのも仕方ありませんね。

お狐様は、しばしば人間の身体に取り憑き、そこに棲みつく力を持っていると昔は考えられていました。お狐様並みの能力を持っているとされていた女性は、いまでも、ときどき、男性に取り憑いて、意のままに動かす力をお持ちの方がいらっしゃるようですから、男にとってはこわ〜い存在。

このようなお狐様と比べて、狸クンは少し可哀想。



頑張って化けてみても、すぐにしっぽを出しちゃうし、民話では、いつもドジな役割で、すぐやっつけられてしまう。

へまばかりしているから、神様のお使いにも採用されない。

だから、昔、ピンクレディが、SOSで、「男はみんな狼なのよ」と歌ったとき、狸扱いされていた男達が心の中で喜んだというのは笑い話。

でも、実際は化けの皮はすぐに剥がれて、今や雑食系の狸から草食系のウサギ扱いにランク落ち。

少年よ！ 狼とは言わない、せめて狸を目指せ！！！！

## 1.28 夭折

若くして惜しまれて死ぬことを「夭折(ようせつ)」ということをご存じですよ。では、幾つまでが夭折と考えられているかご存じでしょうか？

さあ、20歳まで？

ブー。

30歳？

ブー。

実は、男の場合、50歳までなのです。

夭折というのは、その歳で亡くなるのは非常に残念、「もっと生きていれば！」というみんなに惜しまれての死去という意味です。

これは、何らかの才能のある人は、50歳までにはその才能を全て発揮しているはずだから、それまでに亡くなってしまうと、ひょっとすると才能を開花させないまま、或いはもっと才能を発揮出来たはずなのに死んでしまい大変残念ということなんですね。

では、50を過ぎて死んだ場合はどう言うのかというと、「正」死と言われます。

つまりその歳で死ぬのは真っ当であると言うこと。

70を過ぎると、「福」死。

80を過ぎると、「寿」。

90以上は、「祥」。

100を超えると「大慶」と言われます。

これから判るように、長生きすればするほど、めでたい度合いが増えてくる。

但し、これは昔の話。

今はどうかなあ。なんとなく実態に合わないなあ。

ところで、男性の場合はわかったけど、女性の場合はどうなっていると思います？

え、男性と女性で違うの？

違うんですよ。

どう違うの？

あの一 説明してもいいんですけどね。

これをお読みになっている女性の皆様！

これは、昔の人たちが言っていることで、決して私が言っているのではないことを承知していただいた上で、次にお進みください。

女性の場合、夭折に当たるのは、10歳まで。



20歳までが「正」死。

30歳までは「甚」死。甚だ長く生きたという意味のようです。

差別だ！！

どうして女性が惜しまれて亡くなるのが10歳まで？

女性の場合、10歳までには花開くということですかねえ。

ところで、40歳の上はどうなってんの？

えー

これ以上は、いくらこれは故事に過ぎないと私が言っても、身に危険が及ぶおそれがありそうなので、申し上げるのを差し控えさせていただきます。

誰かの答弁みたいって？

そうなんです。

何でも知っていた方が良いとは限らない。知らない方が幸せってことも世の中にはあるのですねえ。

もう一度言いますが、これはあくまで昔のお話。

今は、男の場合、夭折の基準は、みんなが「勝手に」どんどん引き下げて、40歳代を通り越して、20歳代～30歳代までになっている模様。

問題なのは、男の場合、イマドキの実情を見ると、正死を超えて70を過ぎても生きてみると、昔とは逆に、段々不幸な方に傾いてきているみたい。

65過ぎると「芥」、70過ぎると「厄」、80過ぎると「災」、90を超えると「大禍」。

そんな言葉の方が合ってるような気がしますね。

あーあ、情けない！！

女性の場合、今はどうかなあ。

30歳までが「夭折」、60歳代までが「正」死、70を過ぎると、「福」。

80を過ぎると、「寿」、90以上は、「祥」、100を超えると「大慶」。

男性の地位が下がっているのに対して、女性の地位は反比例していますからねえ。

えっ、これでは、男女が不平等だって？

ところで、男の方だけにそっとお話ししますと、昔は、女性の場合、

40だと「変」、50で「殃（おう）」これってわざわざ読んで読むんですって…で、辞書をひいてみると「天罰」「とがめ」ってありました。60で生きると「魅」これは魅力的の魅ではなく、魑魅魍魎の魅…らしい。70は「妖」・・・

90だと「怪」こりゃ、取り殺されそう！

#### 4.26 英国人写真家の見た明治日本

今日は、何日か前に、「英国人写真家の見た明治日本」（講談社学術文庫）を読んでいて目にとまった一節を紹介します。

この英国人写真家は、ハーバード・G・ポンティングとって、1901年（明治34年）から1906年（明治39年）までに、何度も来日し、全国各地を尋ね、富士山、浅間山、阿蘇山にも登り、日露戦争に従軍した経歴を持ち、美術にも造詣が深く、日本人の心にまで深い理解を有していた知日家です。

彼は、膨大な数の当時の日本の写真を残しているだけでなく、彼が感じた当時の日本と日本人の姿を本にしたものがこの「英国人写真家の見た明治日本」です。

では、まず、私が目に留めた一節（第八章「日本の婦人について」）の中でポンティングが、わが国の「婦人」を評して述べた言葉。

「過去に婦人の地位がどうであったにせよ、また現在それがどうなっているにせよ、…家の中で婦人の演ずる役割について、人々の見解が分かれることはない。彼女は独裁者だが、大変利口な独裁者である。彼女は自分が実際に支配しているように見えないところまで支配しているが、それを極めて巧妙に行っているので、夫は自分が手綱を握っていると思っている。そして、可愛らしい妻が実際にはしっかり方向を定めていて、彼女が導くままに従っているだけなのを知らないのだ。」

明治の中期、わが国を訪れ、わが国社会の様々な階層の人間と触れあった聡明な英国人が、ここまで正確に見抜いていることに、私は賛嘆を感じずにはいられませんでした。

彼は、日露戦争に従軍し、ある日、第一師団師団長、黒木為楨大将と懇談するのですが、その際に黒木將軍の言った言葉として、次の一節を紹介しています。

「日本の兵隊の挙げた業績について話すときに忘れてはいけないのは、これらの行為を成し遂げたのは決して日本の男子だけではないということです。もし、わが国の兵隊がその母親から、義務と名誉のためにはすべてを犠牲にしななければならないという武士道の教育を受けなかったら、今日の成果を挙げることはできなかったでしょう。日本の婦人は非常に優しく、おとなしく、そして謙虚で、これからもそうあって欲しいものだと思います。また、それと同時に大変勇敢でもあり、わが国の兵隊の勇気は、大部分、小さいときにその母親から受けた教育の賜物です。一国の歴史の上で婦人の果たす役割は大きく、どこの国でも、もし婦人達が、何にもまして勇敢でやさしく謙虚でなければ、真に偉大な国民とは言えません。」

兵隊と同様に、日本の婦人は、国に大きな貢献をしているのです。」

戦争を賛美するつもりなど毛頭ありませんが、  
国の命運を懸けて戦った明治の日本を支えていたものが何だったかがよくわかる言葉です。

ポンティングは、正確に当時のわが国の婦人を理解していた男の発言を挙げることによって、当時の日本の男と女の本質的な関係を明らかにしたのだと思います。



## 7.15 ♂と♀

今日は、久しぶりに男と女のお話。

♂と♀が男と女を示す記号であることは、まあ誰でも知ってますよね。

でも、ほとんどの方が、これは男女の生殖器の形からきているものと思っておられるようです。

これ、時々どっちがどっちだか分からなくなる人がいるようで、その時の覚え方について、ある方がテレビで♂は、男性のアレ（?!）ですよ、って言っているのを見たことがあります。

最近、そうじゃないという説明を時々耳にするようになってきましたが、まだまだ一般的には誤解されている方が多いようなので、以下で簡単に説明したいと思うのですが、余計なお世話かな？

♂と♀、元々は、それぞれ、火星と金星を表す天文学記号。

ローマ時代、火星は「軍神マルス」の星とされていたのですが、♂は、その軍神マルスが手に持つ盾と槍。

金星は「美の神ヴィーナス」の星。♀は、美の神ヴィーナスが手に持つ手鏡の形。美しさに鏡は必需品ですものね。

下の写真は、ダヴィッドの「ヴィーナスと三美神に武器を取り上げられるマルス」というタイトルの絵ですが、マルスがヴィーナスに取り上げられようとしている武器は、槍と丸い盾なのが見えますね。これが♂記号の由縁です。



次に♀ですが、さすがにヴィーナスが用いた手鏡の絵はありませんので、代わりにメトロポリタン美術館にある古代エジプトの女王が用いていた手鏡の写真を添付しておきま

す。



どうですか？

ちなみに、火星は英語で **Mars**、これは軍神マルスからきています。

金星は英語で **Venus**、これは、ヴィーナスのことですね。

この♂♀記号、最初に雄雌の個体記号として使ったのは、植物学の父として知られているリンネさんなんですけど、これは植物のオス、メスを分類するためで、人間の分類記号ではありませんでした。でも、リンネさん、その時、人間の生殖器を思い描いていたようだから、今の間違いも無理からぬものと思いますね。

ついでですがね、「雌雄同体」の記号というものもあるんですよ。

下の写真の右に乗せておきますが、女性記号の♀に角が生えているように見えるものです。

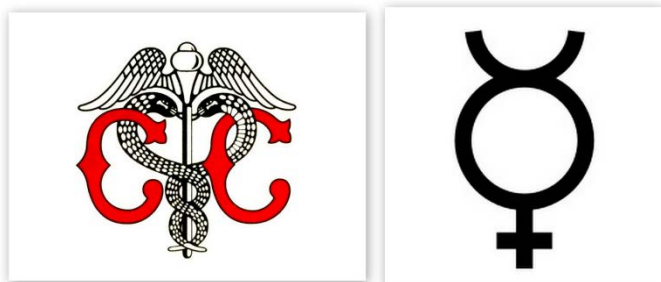
女の人が怒って角を出している訳ではありません。

これは水星（Mercury）の記号。

**Mercury** は、ギリシャ神のヘルメスのことですが、この変な記号は、ゼウスの伝令を勤めていた快足ヘルメスが持っていた伝令杖。角のように見えるのは、杖に絡みついている二匹の蛇。

ヘルメスは、商業の守護神でもありますから、この杖は商業学校のシンボル記号でもあります。有名なところでは、一橋大学の校章に使われていますね。下の写真の左側。

雌雄同体記号なんて言うと、怒られそうです。



ところで、オス・メス記号といえば、漢字には、オスとメスを区別しているものかなり

ありますね。

先日の日記で出てきた「牡蠣」や「牡丹」の「牡」などはそうですが、「牡」はオスで、「牝」がメス。

二つを分けているのは、旁（つくり）に当たる「土」と「匕」ですが、こちらは、♂と♀と違って、男女の生殖器からきています。

え、どこが？

ん、まあ、甲骨文の時代ですから、実物とは、比較しても仕方ありません。ハ、ハ。

この字、偏が「牛」ですから、元はといえば、ウシのオスとメスを示していました。

昔は、「羊」偏なんかもあったようですよ。

獣の場合、偏を変えるだけでいいから、楽ですね。まあ、今では使わなくなりましたが。

ところで、人の場合、偏は「にんべん」だから、男の場合は「仕」？ 女の場合は「化」？ イヤイヤ、これは冗談です。（仕は、旁は土ではなく、土ですしね）

これが鳥になると、オスとメスは、それぞれ「雄」と「雌」になります。旁の「隹」はトリのことで、オスの偏「広」は、肘を張った翼の形。雌の「此」は細く小さいという意味といわれています。

まあ、語源はともかく、雌雄を決するというのは、鳥同士の戦いなんですね。

最近何か大げさな使われ方をしていますが、要するに、コケッコ同士の闘鶏かと思えば、笑えてくるから、不思議です。

うん？

だから、「鳧」（けり）をつけなければいけないのかな？

さて、以前のお話しのとき、貝のオスとメスをどうして判別するかについては、字数の関係で申し上げませんでしたでしたが、これは、中の身の内蔵の色で判別します。

総じて黒い色の場合は牝。白いのは牡。

大きな身の場合は、容易に分かりますので、一度サザエやホタテを食べるときにでも確かめてみてください。どちらも、生殖腺の色が黒緑っぽいのは牝。灰色っぽいのが牡です。

貝の場合、メスは腹黒いんですねー。

牡蠣は、身が全部白いので、牡しかいないと思われたのですね。

あ、そうそう、蜆やトリガイは、雌雄同体だったり、性転換しますから、全部をこれで判断するのは難しいかな？